

【25】他山文鈔

刊1冊

製本発売人 東京府平民 吉川半七

東京々橋区南伝馬町

〔書名よみ〕 たざんぶんしょう 〔著編者〕 工藤主善

〔写刊年次〕 明治一七年（一八八四）

〔所蔵者整理書名〕 他山文鈔

〔外題〕 題箋欠

〔内題〕 他山文鈔

〔その他題〕 〈版心〉 他山文鈔

〔残欠状況〕 完本 〔保存状況〕 やや不良（角裂に破れあり。） 〔装

訂〕 袋綴・四つ目 〔紙数〕 三三丁 〔本文用字〕 漢字 〔二面行数〕

一〇行 〔界線〕 アリ 〔表紙〕 紺色・無地 〔法量〕 縦二二・八糎

×横一四・〇糎 〔料紙〕 楮紙 〔書入〕 ナシ 〔蔵書印〕 「海浦

（朱印） 〔備考〕 ナシ

〔奥付〕 明治十七年六月二日出版御届

同 年七月 出版

著者 青森県土族 工藤主善

青森県中津軽郡弘前

鷹匠町六十八番地

編輯人 青森県土族

東京牛込区若宮町

三十七番地寄留

出版人 青森県土族

青森県中津軽郡弘前

北瓦町廿番地

小笠原精一

山詩文集』がある。

『他山文鈔』は他山の二男であり、本人も父と同様史家として知られる外崎覚によって編まれた、他山の手による漢文を抄録した著作である。書を読むことの意義を説くものや、酒と茶のいずれが優れているかといった論考、他人の著作に寄せた序文、弘前城の碑文など、様々な夕

〔解題〕

工藤主善（以下他山。これは号で本名は主膳だが、外崎覚はすべて主善と書いている。）は文政元年（一八一八）に弘前に生まれ、明治二二年（一八八九）に七二歳で没した。弘前藩士古川儒伯を父として生まれ、三六歳の時に独立し、工藤姓を名乗った。『津軽藩史』をまとめた郷土史家として知られるが、他にも津軽藩の藩校・稽古館で教鞭を取ったり、私塾・思齋堂（別称古川塾）、それを発展的に再編した向陽塾を開いたり、六〇歳の時には東奥義塾に招かれ、教授として一〇年間に在職するなど、生涯を通じて津軽地方の教育振興に貢献した人物でもある。『津軽藩史』と本書の他に著作として、『津軽藩職制』、『津軽藩官制』、『津軽藩禄制』、『津軽藩租税則』、『津軽藩学制』、『津軽藩儒臣略伝』、『霊墓碑史』、『他山詩文集』がある。

イブの文が収められている。

覚は父が詩文をいかに重んじていたかについて、「文を作る必ず之を道義に原け短篇篇章亦世教を裨益するを以て念となす恒曰く文は道を載する所以なり豈に尋常芸科と見做すへけんや」と詩は務めて實際を叙し浮華を事とせず最も平生愛する所のは宋陸放翁の詩なり」と伝えていゝる（『旧津軽藩稽古館学士他山工藤主善先生伝』）。

本書は他山自身によるものというよりも、息子の外崎覚の尽力により成立したと見た方がより適切である。見返しにある「中洲三島毅先生評点」という言葉の通り、本書には文章ごとに中洲による評言が見られるが、中洲は外崎が二五歳の明治一六年（一八八三）に東京に上がった際、主教を受けた人物である。また、「他山文稿叙」は版心に「宮内文学川田君序」とある通り、甕江川田剛によって記されているが、彼も覚の東京での師に当たる。本書の刊行は覚の上京から一年後にあたり、覚が精力的に父の事績を形にして残そうと図ったことが窺える。

そのことは、中洲三島毅が記した「後記」にも見る事ができる。

川田甕江門人外崎覚将刻其父他山翁文稿、携来嘱評、且出示甕江介書、其書曰、近日文章流行、四方乞評、如此者定多、余深恐煩子、然翁学問文章、為奥羽地方巨擘、且覚懇請不已、子其勉評之余匆忙、実如甕江所察然懇々之言亦不可空、乃偷閒披閱之、有学植、有文藻、又実如甕江所称、感服之余、每篇加評、付賞、然忙中卒読、誤見定多、請恕、

なお、外崎覚は海浦義観の学友であり、その関わりから義観の『陸奥津軽深浦沿革誌』には序文を寄せている。同書にはまた、陸羯南の序文もある。そこには「海浦義観は深浦の旧家なり。其弟篤彌は予と交ること旧し。今現に朝鮮京城に在り。頃者義観其著す所の深浦沿革誌を寄せて。予の一読を促す。」と、寄稿の経緯を述べている。羯南は思齋堂に学んだ、いわば他山の教え子でもある。海浦家の人びとの事績を通して、

明治初期における津軽の知識人たちの密な繋がりが窺える。

〔参考〕

- ・外崎覚「旧津軽藩稽古館学士他山工藤主善先生伝」（『日本大家論集』第四卷第一〇号、一八九二年一〇月）
- ・海浦義観『陸奥津軽深浦沿革誌』（深浦保勝会、一八九八年一二月）
- ・鈴木清造「工藤他山伝」（『東奥文化』第四三号、一九七二年八月）
- ・川村欽吾「明治の津軽びと3 外崎覚（1）」（『月刊れぢおん青森』第五〇号、一九八三年一月）
- ・川村欽吾「明治の津軽びと3 外崎覚（2）」（『月刊れぢおん青森』第五一号、一九八三年二月）
- ・荒井清明『続々弘前今昔』（北方新社、一九八九年七月）
- ・海浦由羽子『験乗末資海浦義観』（深浦町教育委員会、二〇〇三年三月）

（尾崎 名津子）



中洲三島毅先生評點

他山文鈔

工藤主善先生著
外崎覺編輯

他山文稿敘
津輕瀨北海。古者蝦夷所居。號
為僻陋。然余嘗從人林。幸北巡
過其地。田野闢。物產殖。雞鳴狗
吠相聞。達乎四境。邑有弘前黑
石波岡藤崎青森小湊。山有岩
城甲田梵珠。水有岩木汗石十

宮内文學川田君序

明治甲申孟秋

甕江川田剛撰



他山文稿序



先府君烏洲與筱崎小竹
翁友善。文詩注。來不絕。翁
曾言。東與弘前人。有工藤
他山者。儒雅溫藉。非末學

大書記官金井君序

里之外益信小竹翁之言
不我欺也翁今猶健康而
外崎君亦家學相承世濟
其美見為鄉黌教官將梓
父文公之於世可謂善養

志者矣嗚呼先府君既逝
余也不肖未能有自立以
顯之及序此稿豈得無報
然內愧乎哉
明治壬午仲冬日

梧棲金井之茶識



例言

- 一 全集三百餘篇今抄二十二篇上梓以問于世亦足見其學問文章之一斑
- 一 是編所載有近稿有舊稿其尤舊者繫二十餘年前之作今不問舊新而抄之
- 一 是編之成、家嚴門人內藤昌小笠原精一之力居多其勞不可沒也
- 一 刷刷期迫不遑細校若有誤謬覽者幸賜指摘

明治十七年六月

津輕

外崎覺

識

他山文鈔 津輕 他山工藤主善著
、讀書不求甚解說 讀書不求甚解說 讀書不求甚解說
讀聖賢之書而欲知聖賢之意者依其學之淺深而
所造亦有淺深矣故讀書之難不可不知焉不獨聖
賢之書為然也至于子史雜書稗官小說亦復然豈
容易讀之耶何則上自經傳下至于子史小說其所
作述人人各殊其意則其行文之體裁措辭之精粗
義理之純駁必體認得而後其書可得而解矣況生

與天道不可得而聞矣其所以教之方必待憤悱而

啓發焉自得之不可以已也嗚呼陶淵明之從容求
道果非後儒之比也
中洲曰論已至自得之地位故有此言淵明千載
如已
○受猶說
皮毛柔澤可愛而易馴尖牙鈎爪班文類虎臥錦茵
而飽魚肉醉々一聲群鼠伏匿王公之尊猶近之而
不厭抑亦獸之貴者耶山齋萬卷之書賴汝之力而
得免齟齬則護聖賢之教其功亦偉矣記云逆貓為
其食田鼠也不知護聖賢之教其功倍於食田鼠矣

中洲曰好禮左

他山文鈔

川田瓮江門人外崎覺將刻其父他
山翁文稿携來囑評且出示瓮江介
書其書曰近日文章流行四方乞評
如此者定多余深恐煩子然翁學問
文章為與羽地方巨擘且覺懇請不
已子其勉評之余忽忙實如瓮江所
察然懇力之言亦不可空乃偷閒披

閱之有學植有文藻又實如瓮江所
稱感服之餘每篇加評付覺然忙中
卒讀誤見定多請恕
明治甲申六月十三日拜識于寒流
石上一株松舍

中洲三島毅

他山文鈔

廿四